

作家名	さとう たけし	作品名	とけいのあるしつない		
	佐藤武		時計のある室内		
	SATO, Takeshi				
生没年	1947-				
出生地	北海道千歳市	作品名 補足			
No Image		制作年	1970 年		
		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	129.8×97.4cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	F60	評価額	800,000 円

作家略歴

1947年北海道千歳市生まれ。独学で油彩画に着手して以来、北海道における具象絵画の分野を牽引してきた。1980年代後半より、インド、ネパール旅行の際に訪れたジャイプールの天文台遺構に着想を得て、塔や都市が崩壊する様子を描いてきた。「第5回上野の森美術館絵画大賞展」特別優秀賞(1987年)、「イメージ・動—北海道の美術'88展」道立近代美術館賞(1988年)、「第11回青木繁記念大賞公募展」優秀賞(2002年)など、常に高い評価を得ている。また若い頃より詩作にも熱心に取り組み、近著は、第23回日本自費出版文化賞・詩歌部門賞(2020年)を受賞し、幅広い分野で才能を発揮している。

特徴

佐藤の最初期の作品の一つ。壁面には、時計、カレンダー、ヒエロニムス・ボス《快樂の園》の右翼パネルの模写が配され、手前の台の上には「愚者」のタロットカードとそのケースが並ぶ。室内という日常の空間に、非日常を感じさせるボスの模写やタロットカードを盛り込む手法はシュルレアリスムの影響によるものだろう。画面内で目を引く、台のクロスに施された赤と白の市松模様は、平滑な画面に遠近感を与える役割を果たしている。この市松模様による奥行の表現は、のちに主題が変わっても多用されており、本作はその始まりに位置づけられる。1980年代から描かれる、塔や都市をモチーフとする以前を初期作品と捉えれば、それらは室内画、人物画、冬の風景画の3つに大別される。当館ではそのうち人物画と冬の風景画を計5点収蔵しており、室内画の作例となる本作の収蔵によって、初期作品の充足を図ることができる。

作家名	さとう たけし	作品名	あおいよる		
	佐藤武		蒼い夜		
	SATO, Takeshi				
生没年	1947-	作品名 補足			
出生地	北海道千歳市	制作年	1981 年		
No Image		技法 材質	アクリル、キャンヴァス		
		寸法	106.4×45.8cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和 3 年度	号数	評価額	700,000	円

作家略歴

1947年北海道千歳市生まれ。独学で油彩画に着手して以来、北海道における具象絵画の分野を牽引してきた。1980年代後半より、インド、ネパール旅行の際に訪れたジャイプールの天文台遺構に着想を得て、塔や都市が崩壊する様子を描いてきた。「第5回上野の森美術館絵画大賞展」特別優秀賞(1987年)、「イメージ・動—北海道の美術'88展」道立近代美術館賞(1988年)、「第11回青木繁記念大賞公募展」優秀賞(2002年)など、常に高い評価を得ている。また若い頃より詩作にも熱心に取り組み、近著は、第23回日本自費出版文化賞・詩歌部門賞(2020年)を受賞し、幅広い分野で才能を発揮している。

特徴

三角形の塔が市松模様の床面に影を落として佇んでいる。この不思議な建造物は、インド北西部ジャイプールにある天文台遺構ジャンタル・マンタル内の日時計サムラート・ヤントラに着想を得ており、1975年に同地へ旅行して以降、佐藤が繰り返し描いたモチーフである。高くとられた上空には複数の弧が絡み合い、静かな情景に軽やかな動きを与えている。一方、地面に目を転じると、人を表しているという複数の透明な球が点在している。これらは塔の傍らで静かに佇み、無人の情景に仄かな気配を感じさせる。青を基調とした画面構成、細かい線描が絡み合う表現は、本作以前に取り組んだ冬の風景画シリーズから見られ、本作はそれらを引き継ぎ、「塔」という新たなテーマを融合させた意欲的な作例と考えられる。

作家名	さとう たけし	作品名	ゆうけいのかいろう3		
	佐藤武		夕景の回廊Ⅲ		
	SATO, Takeshi				
生没年	1947-	作品名 補足			
出生地	北海道千歳市	制作年	2003 年		
No Image		技法 材質	アクリル、キャンヴァス		
		寸法	159.7×79.8cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	1,400,000	円

作家略歴

1947年北海道千歳市生まれ。独学で油彩画に着手して以来、北海道における具象絵画の分野を牽引してきた。1980年代後半より、インド、ネパール旅行の際に訪れたジャイプールの天文台遺構に着想を得て、塔や都市が崩壊する様子を描いてきた。「第5回上野の森美術館絵画大賞展」特別優秀賞(1987年)、「イメージ・動—北海道の美術'88展」道立近代美術館賞(1988年)、「第11回青木繁記念大賞公募展」優秀賞(2002年)など、常に高い評価を得ている。また若い頃より詩作にも熱心に取り組み、近著は、第23回日本自費出版文化賞・詩歌部門賞(2020年)を受賞し、幅広い分野で才能を発揮している。

特徴

画面上部にはアーチが続く柱廊、下部には牧歌的な都市のシルエットが描かれる。前者は一点透視図法を用いた高い求心性を示し、後者は地平線などに見られる水平性が強調され、近景と遠景が効果的に対比されている。それまで描かれてきた都市の崩壊は影を潜め、かつてのインド旅行を回想し、時間の経過とともに強くなった郷愁の思いが表現されている。佐藤は、1996年以降、空と地で舞台を分かち、動と静、豊穡と荒廃などの対比を明確に描き出してきた。当館ではこの時期に描かれた2点を収蔵しており、本作は2000年以降に始まった新たな展開の一例となり、佐藤の表現の幅の広さを示す好例となるだろう。

作家名	さとう たけし	作品名	くれゆくまち		
	佐藤武		暮れゆく街		
	SATO, Takeshi				
生没年	1947-				
出生地	北海道千歳市	作品名 補足			
No Image		制作年	2010 年		
		技法 材質	アクリル、キャンヴァス		
		寸法	188.0×84.5cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	1,600,000 円	

作家略歴

1947年北海道千歳市生まれ。独学で油彩画に着手して以来、北海道における具象絵画の分野を牽引してきた。1980年代後半より、インド、ネパール旅行の際に訪れたジャイプールの天文台遺構に着想を得て、塔や都市が崩壊する様子を描いてきた。「第5回上野の森美術館絵画大賞展」特別優秀賞(1987年)、「イメージ・動—北海道の美術'88展」道立近代美術館賞(1988年)、「第11回青木繁記念大賞公募展」優秀賞(2002年)など、常に高い評価を得ている。また若い頃より詩作にも熱心に取り組み、近著は、第23回日本自費出版文化賞・詩歌部門賞(2020年)を受賞し、幅広い分野で才能を発揮している。

特徴

本作は2004年頃より始まる石棺シリーズの一作。赤みがかった空には四角錐の石塊が、重力を感じさせず宙に静止している。地上には克明に描かれた建造物が幾何学的に連なり、地平線へと続いていく。鑑賞者は空中に視座を置き、目の前に出現した石塊と対峙すると同時に、眼下の荒廃した街を見渡す。視点のずれを巧妙に用いて生まれた違和感が底知れぬ不穏さを引き起こしている。当館には同シリーズの作品を2点収蔵している。それらはいずれも石塊がこちらに迫りくるかのような一点透視図法で描かれており、垂直方向に静止する作例の収蔵は本作が初めてとなる。

作家名	さとう たけし	作品名	たびのおわり『あめあがる』Ⅲ		
	佐藤武		旅の終り『雨あがる』Ⅲ		
	SATO, Takeshi				
生没年	1947-	作品名 補足			
出生地	北海道千歳市	制作年	2015 年		
No Image		技法 材質	アクリル、キャンヴァス		
		寸法	115.0×472.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	3,000,000	円

作家略歴

1947年北海道千歳市生まれ。独学で油彩画に着手して以来、北海道における具象絵画の分野を牽引してきた。1980年代後半より、インド、ネパール旅行の際に訪れたジャイプールの天文台遺構に着想を得て、塔や都市が崩壊する様子を描いてきた。「第5回上野の森美術館絵画大賞展」特別優秀賞(1987年)、「イメージ・動—北海道の美術'88展」道立近代美術館賞(1988年)、「第11回青木繁記念大賞公募展」優秀賞(2002年)など、常に高い評価を得ている。また若い頃より詩作にも熱心に取り組み、近著は、第23回日本自費出版文化賞・詩歌部門賞(2020年)を受賞し、幅広い分野で才能を発揮している。

特徴

2010年代より取り組む佐藤の最新シリーズの一作。それまで描かれていた空中に浮かぶ石塊は忽然と姿を消し、一筋の切れ目が現れる。その両端は細く、空間が静かに裂けたかのようなのである。本作は茫洋とした大地を表現するために、横長のキャンヴァスを採用している。さらに屏風式となっているため、左右のパネルを手前に折り曲げることで、絵画自体によっても遠近感を表すことができる。こうした支持体への工夫も佐藤作品に見られる特徴の一つである。当館には本シリーズ作品の収蔵はなく、発展を続ける近年の成果として重要な作品と言えるだろう。

作家名	さとう たけし	作品名	はいきよ		
	佐藤武		廃墟		
	SATO, Takeshi				
生没年	1947-				
出生地	北海道千歳市	作品名 補足			
No Image		制作年	2019 年		
		技法 材質	アクリル、キャンヴァス		
		寸法	145.8×112.1cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	1,600,000	円

作家略歴

1947年北海道千歳市生まれ。独学で油彩画に着手して以来、北海道における具象絵画の分野を牽引してきた。1980年代後半より、インド、ネパール旅行の際に訪れたジャイプールの天文台遺構に着想を得て、塔や都市が崩壊する様子を描いてきた。「第5回上野の森美術館絵画大賞展」特別優秀賞(1987年)、「イメージ・動—北海道の美術'88展」道立近代美術館賞(1988年)、「第11回青木繁記念大賞公募展」優秀賞(2002年)など、常に高い評価を得ている。また若い頃より詩作にも熱心に取り組み、近著は、第23回日本自費出版文化賞・詩歌部門賞(2020年)を受賞し、幅広い分野で才能を発揮している。

特徴

2010年代より取り組む佐藤の最新シリーズの一作。それまで描かれていた空中に浮かぶ石塊は忽然と姿を消し、一筋の切れ目が現れる。その両端は細く、空間が静かに裂けたかのようなのである。収蔵候補作《旅の終り『雨あがる』Ⅲ》とは異なり、水をたたえた窪地が切り立つ崖に囲まれ際限のないさまを呈している。中央の窪地は画面奥の地平線へと引き込むような方向性を示しており、手前に大きく描かれた城塞との遠近の対比がその効果を強めている。加えて、崖の岩肌や建造物の緻密な描写、水面に見られる幻想的な色彩など、これまで培われてきた技量が示された秀作と言えるだろう。

作家名	さとうちゅうりょう	作品名	ふゆびうら		
	佐藤忠良		冬日裏		
	SATO, Churyo				
生没年	1912-2011				
出生地	宮城県落合村(現・大和町)	作品名 補足			
No Image		制作年	1932 年		
		技法 材質	油彩、板		
		寸法	23.6×33.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	F4	評価額	1,000,000 円

作家略歴

1912年宮城県に生まれ、父の死去にともない母の実家の移転先である北海道夕張に転居。1925年、単身札幌に移り、札幌第二中学校(現札幌西高)に入学。絵画を学ぶため上京し、1934年に東京美術学校(現東京藝術大学)彫刻科塑像部に入学。1939年に同大学卒業後、本郷新らと新制作派協会彫刻部創立に参加。1944年、兵役招集され、戦後も1948年夏までシベリアに抑留される。リアリズムを基本としつつ常に深いヒューマニズムに根差し、気品と生命感あふれる人物像を多数制作。日本人の顔をテーマとした一連の作品により1960年には第3回高村光太郎賞を受賞したほか、フランス国立ロダン美術館で日本人初の個展を開催している。2008年、札幌芸術の森美術館に佐藤忠良記念子どもアトリエがオープン。

特徴

軒を連ねる家屋、その屋根と地面に降り積もった雪、澄み渡る冬の空、札幌の冬の裏町の風景が牧歌的に描かれる。当時は図書館でみる画集や道内画家の印象派風な作品に感嘆したと述懐しており、本作にもその影響が窺える。本作は1932年1月、佐藤忠良が19歳のときに描かれたもの。札幌二中を卒業後、油彩画を独学で描き始め、歯科医院に書生として住み込みながら絵を描いていた時期の稀有な作例である。夕張の小学校で佐藤忠良の担任教諭であった坂下作治氏が所蔵し、受け継がれていた。当館では既に彫刻28点、野外彫刻5点、素描26点、版画22点の佐藤忠良作品を所蔵しているが、油彩作品は初となり、かつ最も制作年の古い作品となる。

作家名	ほんだ せいじ	作品名	ねむりいぬしゃっぽ		
	本田征爾		眠り犬シャツポ		
	HONDA, Seiji				
生没年	1977-	作品名 補足			
出生地	京都府	制作年	2017 年		
No Image		技法 材質	アクリル、墨、キャンヴァス		
		寸法	38.0×45.5cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和3年度	エディション			
		号数		評価額	200,000 円

作家略歴

1977年京都府生まれ。北海道大学水産学部を卒業したのち、2002年、マグロ延縄調査船に乗りこむかたわら、船内で本格的に作品制作を開始する。その後も国内外での調査航海と船内での制作を行い、2011年以降は作家活動に専念する。京都、札幌を中心に精力的に個展を開催。石粉粘土とジェッソにより造形した後、アクリル絵具で丹念に彩色する人物や異形の彫刻作品と、闇の中から浮かび上がるような幻想的な人物像、動物表現を得意とする。

特徴

横向きの人物の頭上には、穏やかに目を閉じる黒い犬の帽子。タイトルには今や古風な響きをもつシャツポ(帽子)という言葉がつけられ、ノスタルジーを醸し出している。作家の作品には鳥や猫、犬など動物の被り物をした人物がしばしば登場する。被り物とはいえ人物以上に生命感にあふれる表現がなされ、人物が張りぼてでむしろ被り物の方が命ある存在であるような、さかしまの世界観が表れている。本作でも、人形のように無表情で白塗りの人物の顔と、穏やかな寝息を立てて眠っているかのような犬が対比的に表現されている。

作家名	ほんだ せいじ	作品名	よるのかお		
	本田征爾		夜の顔		
	HONDA, Seiji				
生没年	1977-	作品名 補足			
出生地	京都府	制作年	2018 年		
No Image		技法 材質	アクリル、墨、キャンヴァス		
		寸法	37.9×45.5cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	200,000	円

作家略歴

1977年京都府生まれ。北海道大学水産学部を卒業したのち、2002年、マグロ延縄調査船に乗りこむかたわら、船内で本格的に作品制作を開始する。その後も国内外での調査航海と船内での制作を行い、2011年以降は作家活動に専念する。京都、札幌を中心に精力的に個展を開催。石粉粘土とジェッソにより造形した後、アクリル絵具で丹念に彩色する人物や異形の彫刻作品と、闇の中から浮かび上がるような幻想的な人物像、動物表現を得意とする。

特徴

人物の手は犬や蛇の形になり、三人の女性の頭部は一つの身体のもとに融合する。中心に位置する女性の頭からは、さらにうつろな目をした大きな犬の姿が漂い出ている。変幻する人と動物の造形にはシュールレアリスムに通じる作家の関心がうかがえる。本作を特徴づける点は、奥行や空間のありかが不明瞭なことにもあり、これによって意識や理性から離れた夢を思わせる世界が現出している。三頭の女性像は背景の暗闇と混ざり合い、女性の黒髪なのか背景の闇なのかははっきりせず、両者が混然一体と化しているのである。異質な画面構成と、人と人ならざるものの混淆した世界による独自の画境を開く作家の特徴がよく表れている。

作家名	ほんだ せいじ	作品名	あおむよるに		
	本田征爾		青む夜に		
	HONDA, Seiji				
生没年	1977-	作品名 補足			
出生地	京都府	制作年	2019 年		
No Image		技法 材質	水可溶性油絵具、板		
		寸法	41.0×32.0cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和3年度	エディション			
		号数	評価額	200,000	円

作家略歴

1977年京都府生まれ。北海道大学水産学部を卒業したのち、2002年、マグロ延縄調査船に乗りこむかたわら、船内で本格的に作品制作を開始する。その後も国内外での調査航海と船内での制作を行い、2011年以降は作家活動に専念する。京都、札幌を中心に精力的に個展を開催。石粉粘土とジェッソにより造形した後、アクリル絵具で丹念に彩色する人物や異形の彫刻作品と、闇の中から浮かび上がるような幻想的な人物像、動物表現を得意とする。

特徴

静かに目を閉じる女性像とそこかたわらの青い犬は、背景の暗闇となじみながらも存在感を放つ。本作に深みを与えているのはその背景である。暗闇の内奥には、豊かな諧調の色彩が潜む。青、赤、緑、黄など鮮やかな色合いの名残は、閉じた臉の裏側におぼろげに現れる無形の色斑を思い起こさせ、色彩に対する作家の鋭敏な感性が表れている。

作家名	すなざわ びっき	作品名	〔女〕		
	砂澤ビッキ		〔女〕		
	SUNAZAWA, Bikky				
生没年	1931-1989	作品名 補足			
出生地	北海道旭川市	制作年	1982 年		
No Image		技法 材質	水彩、鉛筆、紙		
		寸法	45.0×34.7cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和 3 年度	エディション			
		号数	評価額	180,000	円

作家略歴

1931 年、父・砂澤市太郎(アイヌ名トアカンノ)と母・ペラモンコロ(ベアモンコロ、ペラモンコロなど諸説あり)の子として北海道旭川市に生まれる。1953 年、22 歳の時に木彫を始め、モダンアート協会に所属し、読売アンデパンダン展などにも出展。阿寒湖畔と鎌倉市を往来しながら制作と発表を続ける。1959 年、旭川市に戻り、北海道と東京を中心に多数の展覧会に出展。1978 年には北海道中川郡音威子府村に移住し、廃校となった箴島小学校跡地をアトリエとする。1983 年、北海道生活文化・スポーツ海外交流事業の派遣員としてカナダのブリティッシュ・コロンビアに 3 ヶ月間滞在し、作品を制作。1986 年、札幌芸術の森野外美術館に野外彫刻《四つの風》を設置。1989 年、骨髄がんにより逝去。

特徴

水色と赤、濃紺の水彩によって、抽象化された人物と鳥を思わせる形態が描かれた作品。この色彩は、音威子府に拠点を移したのちに制作された 1980 年代の「王と王妃」シリーズの平面作品にも用いられる特徴的な組み合わせである。本作の人物の顔において、鼻は滴る液体のように細く伸び、上下の脛は厚く強調して描かれている。これらは砂澤がアフリカの木彫仮面など民族芸術に関心を寄せながら制作した「木面」シリーズを彷彿とさせ、当館所蔵の砂澤による《樹面 4-1》からの発展を示す作品といえる。

作家名	さきやましゅんこう	作品名	らだっく		
	笹山峻弘		ラダック		
	SASAYAMA, Shunkow				
生没年	1946-2013	作品名 補足			
出生地	北海道香深村(現・礼文町)	制作年	2002 年		
No Image		技法 材質	紙本彩色		
		寸法	183.0×368.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和 3 年度	号数	評価額	2,300,000	円

作家略歴

1946 年礼文島香深村(現・礼文町)生まれ。1962 年札幌工業高校機械科入学、以後札幌を拠点に活動し、1965 年同校卒業。在学中より、全道美術協会展、新制作協会展などへ出品。1970～71 年、74～75 年にかけて、アメリカ、ヨーロッパなどを渡り歩く。1980 年、礼文島天龍寺に 144 枚の版画からなる天井版画《北方四季変相図》を制作。その後香深中学校、礼文町庁舎、町民活動センター、町役場船泊支所、総合スポーツセンターなど礼文町内をはじめ、宗谷合同庁舎、枝幸町町民活動センター、豊川稲荷札幌別院など数多くの施設で壁画やレリーフなどの作品を残した。1990 年からほぼ毎年のようにインドを訪れ取材を続け、建築や風景、風俗をテーマとした作品を制作。1990 年代中頃より、描画材を油絵具から岩絵具へと移行した。2013 年没。

特徴

インドに取材した作品の一つ。取材地はタイトルどおりラダック地方、その中心都市レーである。画面中央上部に極彩色で彩られた曼荼羅を配し、画面下部には荒涼とした稜線と丘にそびえる旧王宮が特徴的な街並みが対比的に配される。岩絵の具を何層にも重ね描かれた濃密で重厚な画面からは、その壮大なスケールとともに、聖と俗、仏と人が混然となった土地の深い歴史性や神秘感、その土地に魅了された画家の憧憬が感じ取れよう。当館では既に《凍干魚》(1971 年、油彩)、《日本海風景》(1986 年、日本画)の 2 点の笹山作品を所蔵しているが、いずれもインド取材以前のものであり、作家のライフワークともいえるインドを主題とした本作がコレクションの充実に果たす役割は大きいと言える。

作家名	あいおう	作品名	うえるうえるうえる		
	愛謳		Well! Well! Well!		
	Ay-O				
生没年	1931-				
出生地	茨城県玉造町(現・行方市)	作品名 補足			
No Image		制作年	1974 年		
		技法 材質	シルクスクリーン、紙		
		寸法	72.5×51.0cm		
取得方法	寄贈	エディション	173/175		
選定年度	令和3年度	号数		評価額	180,000 円

作家略歴

1931年、海軍の航空教官だった父・飯島孝澄と母・アイの長男として茨城県行方郡玉造町(現・行方市)に生まれる。本名は飯島孝雄。1950年、東京教育大学(現・筑波大学)教育学部芸術学科油絵科に入学。在学中の1953年、「第5回日本アンデパンダン展」に初出品(以後、第10回まで連続出品)。また同年より瑛久らによる「デモクラート美術家協会」に参加。1955年に池田満寿夫らと「実在者」を結成。1958年に渡米。同地で前衛芸術グループ「フルクサス」の中心人物ジョージ・マチューナスに出会い、自らもそこに参加。1966年の第33回ヴェネチア・ビエンナーレ、1967年バンクーバー国際版画ビエンナーレ、1971年サンパウロ・ビエンナーレなど多数の国際展に作品を発表。物体やイメージを虹色で分解し再構築した版画作品で今なお世界的に評価を受けている。

特徴

本作は1974年の作品であるが、画面右側の女性像のモチーフは、その7年前、1967年作の《Mr. & Mrs. Rainbow》に既に登場しているものである。67年の作品では、腕を組む二人の男女が描かれているが、その後そのモチーフの縦横比を変化させ縦に伸ばした作品、横に伸ばした作品、あるいは垂直線や水平線を曲線へと変化させた作品などバリエーションがある。同様に宇宙人(と作家が呼ぶ)のモチーフも、1974年の《Bonino show paper》をはじめ、1975年《Rainbow XX》などに転用されている。本作はそうしたバリエーションのなかで制作されたもので、作家の特徴である虹色の色彩の下、宇宙人と人物が手をつなぎ、ユーモラスさを漂わせる。

作家名	あいおう	作品名	らぶれたー		
	爨嘔		Love letter		
	Ay-O				
生没年	1931-	作品名 補足			
出生地	茨城県玉造町(現・行方市)	制作年	1974 年		
No Image		技法 材質	シルクスクリーン、紙		
		寸法	61.5×44.0cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和 3 年度	エディション			
		号数	評価額	80,000	円

作家略歴

1931年、海軍の航空教官だった父・飯島孝澄と母・アイの長男として茨城県行方郡玉造町(現・行方市)に生まれる。本名は飯島孝雄。1950年、東京教育大学(現・筑波大学)教育学部芸術学科油絵科に入学。在学中の1953年、「第5回日本アンデパンダン展」に初出品(以後、第10回まで連続出品)。また同年より瑛久らによる「デモクラート美術家協会」に参加。1955年に池田満寿夫らと「実在者」を結成。1958年に渡米。同地で前衛芸術グループ「フルクサス」の中心人物ジョージ・マチューナスに出会い、自らもそこに参加。1966年の第33回ヴェネチア・ビエンナーレ、1967年バンクーバー国際版画ビエンナーレ、1971年サンパウロ・ビエンナーレなど多数の国際展に作品を発表。物体やイメージを虹色で分解し再構築した版画作品で今なお世界的に評価を受けている。

特徴

1974年、爨嘔作品の摺師であった岡部徳三とともに、現代版画センター代表の綿貫不二夫が爨嘔の清瀬アトリエを訪ね、「若者を対象とした若い作家の版画を出版販売したい」と依頼し、爨嘔がそれに応えたもの。大量のエディションナンバーをつくり、安く販売することが爨嘔から提案されたという。爨嘔は1972年に制作された同タイトルのリトグラフ作品《Love letter》を基とし、本作が制作された。エディションは11,111あり、(72年作品は紙にインクで描いたものを写真製版し、それをリトグラフにするという作品であった)16時間通してサインをし続け、1日で完成されたという。

作家名	おかべ まさお	作品名	Stroke-on the recorded stone, Nov. 18, 1984 (15 works-#15)		
	岡部昌生				
	OKABE, Masao				
生没年	1942-	作品名 補足			
出生地	北海道根室市	制作年	1984 年		
No Image		技法 材質	鉛筆、紙		
		寸法	30.3×47.5cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和 3 年度	号数	評価額	80,000	円

作家略歴

1942年北海道根室市生まれ。北海道札幌東高等学校在学中に北海道美術協会展に出品し入選。北海道学芸大学(現北海道教育大学)卒業。1977年より、建物の壁面や路上に紙をあて、その凹凸を鉛筆で擦り取るフロッターージュの手法による制作に着手。1979年、パリに滞在し、169点の《都市の皮膚》を制作。2006年、北海道文化奨励賞受賞。2007年、第52回ヴェネツィア・ビエンナーレの日本館代表作家として出品。現在も国内外の各都市で制作、活動を行っている。現在、札幌大谷大学短期大学部教授。北広島市在住。

特徴

石肌とそこに刻印されている2とMの文字が写し取られている。画面全体にはそれらをこすり取った無数のストロークの跡がはっきりと見て取れ、作品が完成するまでの経過とその結果が一つに表されている。岡部は1979年パリのイヴリ・シュル・セーヌに滞在した際に、街路や壁を擦り取る最初の本格的なフロッターージュに取り組んだ。岡部は、そこでの169点の制作を通して「都市は巨大な版である」という視点を獲得する。フロッターージュによって都市に埋め込まれた記憶を浮かび上がらせ、行為の痕跡とともに自身の生を同時に刻み込むという、その場所での作家の内省が作品の出発点となっている。広島市現代美術館開設準備室からの依頼で制作した《Stroke on the Road in Hiroshima, August 1987/1988》以降、岡部はパブリックな活動やコラボレーションによる制作へと幅を広げていく。本作はそれ以前の個人的視点を模索していく過程での貴重な作例であると言える。

作家名	おかべ まさお	作品名	Stroke-on the recorded wall, Nov. 18, 1984 (15 works-#15)		
	岡部昌生				
	OKABE, Masao				
生没年	1942-	作品名 補足			
出生地	北海道根室市	制作年	1984 年		
No Image		技法 材質	鉛筆、紙		
		寸法	30.9×46.5cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和 3 年度	エディション			
		号数	評価額	80,000	円

作家略歴

1942年北海道根室市生まれ。北海道札幌東高等学校在学中に北海道美術協会展に出品し入選。北海道学芸大学(現北海道教育大学)卒業。1977年より、建物の壁面や路上に紙をあて、その凹凸を鉛筆で擦り取るフロッタージュの手法による制作に着手。1979年、パリに滞在し、169点の《都市の皮膚》を制作。2006年、北海道文化奨励賞受賞。2007年、第52回ヴェネツィア・ビエンナーレの日本館代表作家として出品。現在も国内外の各都市で制作、活動を行っている。現在、札幌大谷大学短期大学部教授。北広島市在住。

特徴

等間隔に配置された点と《Stroke-on the recorded stone, Nov. 18, 1984 (15 works-#15)》と同様のフォントで表された4の文字が写し取られている。画面全体にはそれらをこすり取った無数のストロークの跡がはっきりと見て取れ、作品が完成するまでの経過とその結果が一つに表されている。岡部は1979年パリのイヴリ・シュル・セヌに滞在した際に、街路や壁を擦り取る最初の本格的なフロッタージュに取り組んだ。岡部は、そこでの169点の制作を通して「都市は巨大な版である」という視点を獲得する。フロッタージュによって都市に埋め込まれた記憶を浮かび上がらせ、行為の痕跡とともに自身の生を同時に刻み込むという、その場所での作家の内省が作品の出発点となっている。広島市現代美術館開設準備室からの依頼で制作した《Stroke on the Road in Hiroshima, August 1987/1988》以降、岡部はパブリックな活動やコラボレーションによる制作へと幅を広げていく。本作はそれ以前の個人的視点を模索していく過程での貴重な作例であると言える。

作家名	おかべ まさお	作品名	Frottage / Sakaigawa Promenade in Sapporo, October 7-8, 1989 / Art Event in Sapporo 1989 Sakaigawa-Yugyo		
	岡部昌生				
	OKABE, Masao				
生没年	1942-	作品名 補足			
出生地	北海道根室市	制作年	1989 年		
No Image		技法 材質	オイルチョーク、紙		
		寸法	30.5×50.9cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和3年度	エディション			
		号数	評価額	80,000	円

作家略歴

1942年北海道根室市生まれ。北海道札幌東高等学校在学中に北海道美術協会展に出品し入選。北海道学芸大学(現北海道教育大学)卒業。1977年より、建物の壁面や路上に紙をあて、その凹凸を鉛筆で擦り取るフロッターージュの手法による制作に着手。1979年、パリに滞在し、169点の《都市の皮膚》を制作。2006年、北海道文化奨励賞受賞。2007年、第52回ヴェネツィア・ビエンナーレの日本館代表作家として出品。現在も国内外の各都市で制作、活動を行っている。現在、札幌大谷大学短期大学部教授。北広島市在住。

特徴

1989年に開催されたアートイベント「界川游行」でのワークショップで制作された作品の一部。このイベントには、かつて札幌市中央区を流れた界川に想いを寄せて、いけばな、造形、現代美術、パフォーマンスや講演、詩の朗読など、さまざまなジャンルのアーティストが参集した。ワークショップは2日間にわたって行われ、界川地域の子供を中心とした住民100名とともに、白テロン布150mをオイルチョークで界川遊歩道をフロッターージュした。現在では暗渠となり失われた川とその道の記憶を手でたどり、札幌という都市の歴史を一つの形にした作品である。

作家名	たなべ かずろう	作品名	でいすたんす		
	田辺和郎		DISTANCE・I		
	TANABE, Kazuro				
生没年	1937-	作品名 補足			
出生地	神奈川県横浜市	制作年	1980 年代		
No Image		技法 材質	シルクスクリーン、紙		
		寸法	37.5×37.5cm		
取得方法	寄贈	エディション	6/10		
選定年度	令和 3 年度	号数	評価額	50,000	円

作家略歴

1937 年横浜市生まれ。1959 年東北大学教育学部美術科卒業。1980-81 年、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリ、ニューヨークにて学ぶ。シルクスクリーンを中心に、銅版画、油彩、写真作品などを手掛ける。受賞歴に 1977 年第 8 回国際青年美術家展文部大臣賞、1987 年第 9 回版画グランプリ展大賞、1982 年第 3 回日本グラフィック展写真部門佳作賞。国立国際美術館、神奈川県立近代美術館、栃木県立美術館、宮城県立美術館、北海道立近代美術館、パリ国立図書館、大英博物館などに作品収蔵。日本版画協会会員。

特徴

1981 年頃より 90 年代後半まで手掛けられた「DISTANCE」シリーズのひとつ。70 年代に本シリーズの前に手掛けていた「楽園」シリーズでは、有機的でシュルレアリスム的な形体と、原色を多用した強く明快な色彩によってそのモチーフを展開させていたが、本シリーズでは一転して色を多用せず、円形や矩形などの単純な幾何学的な形体と線によって画面が構成される。後年、形態や組み合わせのバリエーションが増えたが、本作は、垂直と水平の線のみによって構成される作品。ミニマルな構成ながら、線は機械的な直線ではなく、わずかな強弱やブレを残すことで有機性を感じさせ、冠されたタイトルとあわせて、古代数字を思わせる図像を生みだしている。

作家名	たなべ かずろう	作品名	でいすたんす		
	田辺和郎		DISTANCE・II		
	TANABE, Kazuro				
生没年	1937-	作品名 補足			
出生地	神奈川県横浜市	制作年	1980 年代		
No Image		技法 材質	シルクスクリーン、紙		
		寸法	37.5×37.5cm		
取得方法	寄贈	エディション	6/10		
選定年度	令和 3 年度	号数	評価額	50,000	円

作家略歴

1937 年横浜市生まれ。1959 年東北大学教育学部美術科卒業。1980-81 年、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリ、ニューヨークにて学ぶ。シルクスクリーンを中心に、銅版画、油彩、写真作品などを手掛ける。受賞歴に 1977 年第 8 回国際青年美術家展文部大臣賞、1987 年第 9 回版画グランプリ展大賞、1982 年第 3 回日本グラフィック展写真部門佳作賞。国立国際美術館、神奈川県立近代美術館、栃木県立美術館、宮城県立美術館、北海道立近代美術館、パリ国立図書館、大英博物館などに作品収蔵。日本版画協会会員。

特徴

1981 年頃より 90 年代後半まで手掛けられた「DISTANCE」シリーズのひとつ。70 年代に本シリーズの前に手掛けていた「楽園」シリーズでは、有機的でシュルレアリスム的な形体と、原色を多用した強く明快な色彩によってそのモチーフを展開させていたが、本シリーズでは一転して色を多用せず、円形や矩形などの単純な幾何学的な形体と線によって画面が構成される。後年、形態や組み合わせのバリエーションが増えたが、本作は、垂直と水平の線のみによって構成される作品。ミニマルな構成ながら、線は機械的な直線ではなく、わずかな強弱やブレを残すことで有機性を感じさせ、冠されたタイトルとあわせて、古代数字を思わせる図像を生みだしている。

作家名	たなべ かずろう	作品名	でいすたんす		
	田辺和郎		DISTANCE・III		
	TANABE, Kazuro				
生没年	1937-	作品名 補足			
出生地	神奈川県横浜市	制作年	1980 年代		
No Image		技法 材質	シルクスクリーン、紙		
		寸法	37.5×37.5cm		
取得方法	寄贈	エディション	6/10		
選定年度	令和 3 年度	号数	評価額	50,000	円

作家略歴

1937 年横浜市生まれ。1959 年東北大学教育学部美術科卒業。1980-81 年、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリ、ニューヨークにて学ぶ。シルクスクリーンを中心に、銅版画、油彩、写真作品などを手掛ける。受賞歴に 1977 年第 8 回国際青年美術家展文部大臣賞、1987 年第 9 回版画グランプリ展大賞、1982 年第 3 回日本グラフィック展写真部門佳作賞。国立国際美術館、神奈川県立近代美術館、栃木県立美術館、宮城県立美術館、北海道立近代美術館、パリ国立図書館、大英博物館などに作品収蔵。日本版画協会会員。

特徴

1981 年頃より 90 年代後半まで手掛けられた「DISTANCE」シリーズのひとつ。70 年代に本シリーズの前に手掛けていた「楽園」シリーズでは、有機的でシュルレアリスム的な形体と、原色を多用した強く明快な色彩によってそのモチーフを展開させていたが、本シリーズでは一転して色を多用せず、円形や矩形などの単純な幾何学的な形体と線によって画面が構成される。後年、形態や組み合わせのバリエーションが増えたが、本作は、垂直と水平の線のみによって構成される作品。ミニマルな構成ながら、線は機械的な直線ではなく、わずかな強弱やブレを残すことで有機性を感じさせ、冠されたタイトルとあわせて、古代数字を思わせる図像を生みだしている。

作家名	たなべ かずろう	作品名	でいすたんす		
	田辺和郎		DISTANCE・IV		
	TANABE, Kazuro				
生没年	1937-	作品名 補足			
出生地	神奈川県横浜市	制作年	1980 年代		
No Image		技法 材質	シルクスクリーン、紙		
		寸法	37.5×37.5cm		
取得方法	寄贈	エディション	6/10		
選定年度	令和 3 年度	号数	評価額	50,000	円

作家略歴

1937 年横浜市生まれ。1959 年東北大学教育学部美術科卒業。1980-81 年、文化庁派遣芸術家在外研修員としてパリ、ニューヨークにて学ぶ。シルクスクリーンを中心に、銅版画、油彩、写真作品などを手掛ける。受賞歴に 1977 年第 8 回国際青年美術家展文部大臣賞、1987 年第 9 回版画グランプリ展大賞、1982 年第 3 回日本グラフィック展写真部門佳作賞。国立国際美術館、神奈川県立近代美術館、栃木県立美術館、宮城県立美術館、北海道立近代美術館、パリ国立図書館、大英博物館などに作品収蔵。日本版画協会会員。

特徴

1981 年頃より 90 年代後半まで手掛けられた「DISTANCE」シリーズのひとつ。70 年代に本シリーズの前に手掛けていた「楽園」シリーズでは、有機的でシュルレアリスム的な形体と、原色を多用した強く明快な色彩によってそのモチーフを展開させていたが、本シリーズでは一転して色を多用せず、円形や矩形などの単純な幾何学的な形体と線によって画面が構成される。後年、形態や組み合わせのバリエーションが増えたが、本作は、垂直と水平の線のみによって構成される作品。ミニマルな構成ながら、線は機械的な直線ではなく、わずかな強弱やブレを残すことで有機性を感じさせ、冠されたタイトルとあわせて、古代数字を思わせる図像を生みだしている。

作家名	てしまけいさぶろう	作品名	しろふくろうのやま		
	手島圭三郎		しろふくろうの山		
	TESHIMA, Keisaburo				
生没年	1935-	作品名 補足			
出生地	北海道紋別市	制作年	1979 年		
No Image		技法 材質	木版、紙		
		寸法	52.8×74.0cm		
取得方法	寄贈	エディション	7/100		
選定年度	令和 3 年度	号数	評価額	200,000	円

作家略歴

1935 年紋別市生まれ。1957 年北海道学芸大学札幌分校(現・北海道教育大学札幌校)卒業。中学校の美術教諭として勤務する傍ら、版画制作を行う。1977 年、専業の版画家として独立、1979 年日本版画協会会員。1982 年、絵本処女作『しまふくろうのみずうみ』を出版で絵本にっぽん賞(現・日本絵本賞)受賞。以後、全道展や日本版画協会展への出品に加え、北海道に生きる動物や自然、アイヌの物語をテーマとした絵本制作を 1 年に 1 冊のペースで継続的に行う。2021 年、40 冊目となる『きたきつねとはるのいのち』を出版。2017 年北海道功労賞受賞、2018 年地域文化功労者表彰。

特徴

人物や顔、仮面などをテーマとしていた手島だが、この頃より、西洋画風に走る絵画界に相對し、北海道の自然をテーマとしはじめた。中央上部に大きく描かれたシロフクロウは、樹木によって構成される山肌と一体となり、その存在を大きく主張する。広く取られた空の背景と対照的に、遠くの山肌や木の葉振りとフクロウの毛並みは細く丹念に彫られ、それぞれが呼応し彫りの力強さを感じさせる。フクロウの頭部は聳え立つ山の頂点となり、画面上部の空の背景との対比も相まって、神々しさを漂わせている。シュルレアリスム的な空気を残しながらも、自身を培った北海道の自然への畏敬の念が感じられる。本作は日本版画協会展出品作品、この年会員推挙。

作家名	てしま けいさぶろう	作品名	しまふくろうのき		
	手島圭三郎		しまふくろうの樹		
	TESHIMA, Keisaburo				
生没年	1935-	作品名 補足			
出生地	北海道紋別市	制作年	1980 年		
No Image		技法 材質	木版、紙		
		寸法	52.8×74.0cm		
		取得方法	寄贈	エディション	2/100
選定年度	令和3年度	号数		評価額	200,000 円

作家略歴

1935年紋別市生まれ。1957年北海道学芸大学札幌分校(現・北海道教育大学札幌校)卒業。中学校の美術教諭として勤務する傍ら、版画制作を行う。1977年、専業の版画家として独立、1979年日本版画協会会員。1982年、絵本処女作『しまふくろうのみずうみ』を出版で絵本にっぽん賞(現・日本絵本賞)受賞。以後、全道展や日本版画協会展への出品に加え、北海道に生きる動物や自然、アイヌの物語をテーマとした絵本制作を1年に1冊のペースで継続的に行う。2021年、40冊目となる『きたきつねとはるのいのち』を出版。2017年北海道功労賞受賞、2018年地域文化功労者表彰。

特徴

シマフクロウの姿が、大木と同化しているように描かれる。樹木の木肌とフクロウの毛並みはその境目を明らかにしておらず、シームレスに接続されている。木は画面右側でその枝が折れているような様相をも呈するが、その一方で枝は画面左上へ、右上へと伸び、また葉を湛えるその様からは生命の息吹を感じさせる。森に身を潜め、獲物を狙うシマフクロウの肅然としたイメージと、屹立する樹木の威容を湛えたイメージが混然一体となり、厳しい自然の中に生きる凜とした生命のエネルギーを感じさせる。

作家名	てしま けいさぶろう	作品名	しまふくろうのみずうみ・りゅうぼく		
	手島圭三郎		しまふくろうのみずうみ・流木		
	TESHIMA, Keisaburo				
生没年	1935-	作品名 補足			
出生地	北海道紋別市	制作年	1981年		
No Image		技法 材質	木版、紙		
		寸法	52.8×74.0cm		
取得方法	寄贈	エディション	33/100		
選定年度	令和3年度	号数		評価額	200,000 円

作家略歴

1935年紋別市生まれ。1957年北海道学芸大学札幌分校(現・北海道教育大学札幌校)卒業。中学校の美術教諭として勤務する傍ら、版画制作を行う。1977年、専業の版画家として独立、1979年日本版画協会会員。1982年、絵本処女作『しまふくろうのみずうみ』を出版で絵本につぼん賞(現・日本絵本賞)受賞。以後、全道展や日本版画協会展への出品に加え、北海道に生きる動物や自然、アイヌの物語をテーマとした絵本制作を1年に1冊のペースで継続的に行う。2021年、40冊目となる『きたきつねとはるのいのち』を出版。2017年北海道功労賞受賞、2018年地域文化功労者表彰。

特徴

1981年第49回日本版画協会展出品作品で、手島を絵本制作へ向かわせる契機となった作品である。本作を見た福武書店(現・ベネッセコーポレーション)編集者の松居友が、木版画による絵本制作を依頼したことがきっかけとなり、以降長年にわたって続く手島の絵本制作がスタートした。丹念に彫りこまれた画面では、それぞれのモチーフの質感に合わせた線の選択がなされているために、手数が多いたがらも無駄がない。輪郭線ではなく線の集積によって、その対象を立体的に捉え、魚を捕らえたフクロウの羽ばたきを躍動感を持って表現している。

作家名	はまにしかつのり	作品名	げーむいこう なんぼー4		
	浜西勝則		Game-移行 No.4		
	HAMANISHI, Katsunori				
生没年	1949-	作品名 補足			
出生地	北海道二海郡八雲町	制作年	1980年		
No Image		技法 材質	メゾチント、紙		
		寸法	44.5×60.5cm		
		取得方法	寄贈	エディション	1/30
選定年度	令和3年度	号数		評価額	120,000 円

作家略歴

1949年、北海道二海郡八雲町に生まれる。1973年、東海大学教養学部芸術学科卒業。1978年、イビサ国際版画ビエンナーレ(スペイン)にて最高賞を受賞したことを皮切りに、グレンフェン国際版画トリエンナーレ最高賞(1982年、スイス)、カボ・プリオ国際版画ビエンナーレ大賞(1983年、ブラジル)、リストウェル国際版画ビエンナーレ佳作賞(1985年、アイルランド)、台湾国際版画展金賞(1987年、台湾)など、国際展での受賞が相次いだ。1987年から1988年にかけて、文化庁芸術家在外研修員としてペンシルベニア大学大学院に学ぶ。1989年、バルパライソ国際版画ビエンナーレ優秀賞受賞(チリ)。同年、バート・バーバン国際版画ビエンナーレ優秀賞受賞(インド)。1999年、山本鼎版画大賞展佳賞受賞。2003年、アンカラ国際蔵書票コンペティション優秀賞受賞(トルコ)。2004年、「Japanese Masters of Mezzotint」(浜口陽三・浜西勝則による二人展、ウースター美術館、アメリカ)開催。現在、日本版画協会会員、春陽会会員。また、玉川大学芸術学部非常勤講師、横浜美術短期大学非常勤講師として、版画技法の指導にもあたる。

特徴

「Game」シリーズは1978年の《Game-移行 No.1》を初めとし、同年にNo.2、1980年に本作を含むNo.3～No.7が制作されている。浜西勝則の作品は、1977年の作品《接合“○□△”》を既に所蔵しているが、本作を含む「Game」シリーズはその発展形といえるものである。「接合」シリーズでは金属片に布を巻き付けたオブジェをモチーフとしていたが、本作ではそこに、ねじり、折り返しの要素が加えられている。巻きつけられた布、そしてねじりによる陰影の微細な変化が、卓越したメゾチント技法により表現されている。

作家名	ふなこしかつら	作品名	しずかなかがみのために		
	舟越桂		静かな鏡のために		
	FUNAKOSHI, Katsura				
生没年	1951-	作品名 補足			
出生地	岩手県盛岡市	制作年	1987年		
No Image		技法 材質	ドライポイント、ハーネミューレ紙		
		寸法	14.8×9.6cm		
		エディション	35/50		
取得方法	寄贈	号数	評価額	120,000	円
選定年度	令和3年度				

作家略歴

1951年、岩手県盛岡市生まれ。父は彫刻家の舟越保武。1975年、東京造形大学彫刻科卒業。1977年、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。大学院在学中に函館のトラピスト修道院から2.3メートルにおよぶ聖母子像の依頼を受け、1977年、制作・設置した。このとき、初めて楠を材に用いた。その硬度と自身の彫刻する速度とがうまく符合したことから、その後、現在に至るまで楠を主材として用いる。1979年、妻をモデルに木彫の半身像を制作。大理石の眼をはめこみ、古拙と新味の調和の取れた静謐な彫刻スタイルを確立する。1988年のヴェネツィア・ビエンナーレで日本代表作家の一人として選出されたのを皮切りに、1989年のサンパウロ・ビエンナーレ、1992年のドクメンタIX、シドニービエンナーレなどに参加し、具象彫刻の新しい可能性を広げる作家として国内外で高い評価を得た。1991年、タカシマヤ文化基金第1回新鋭作家奨励賞、1995年、第26回中原悌二郎賞優秀賞、1997年、第18回平櫛田中賞、2003年、第33回中原悌二郎賞、2009年、芸術選奨文部科学大臣賞、毎日芸術賞を受賞。2011年紫綬褒章受章。2003年、「舟越桂 1980-2003」が東京都現代美術館、北海道立旭川美術館などで開催される。

特徴

作家は彫刻の制作同様、版画制作もまた自身の内面と向き合う重要な表現手法の一つと位置づけている。1987年に本作を含めた3点の銅版画(ドライポイント、エングレーヴィング)が制作されているが、この3点が舟越が発表した初めての版画である。文化庁芸術家在外研修員として、1986年よりロンドンに滞在し、その際に彫られたもので、刷りは日本で行われた。本作は1989年に制作された等身大木彫作品《静かな鏡》(アメリカの個人蔵)の素描として描かれた。当館では舟越桂の版画作品として、1990年《静かな鏡より ステート1》、2001年《森の言葉》の2点を所蔵しているが、本作はそれに先駆けて制作された貴重な作例である。

作家名	ふなこしかつら	作品名	さばくでみるゆめ		
	舟越桂		砂漠で見る夢		
	Funakoshi,Katsura				
生没年	1951-				
出生地	岩手県盛岡市	作品名 補足			
No Image		制作年	2005 年		
		技法 材質	ダイレクトグラビア、エングレービング、ドライポイント、紙		
		寸法	55.7×40.4cm		
取得方法	寄贈	エディション	A.P.7		
選定年度	令和 3 年度	号数		評価額	280,000 円

作家略歴

1951 年、岩手県盛岡市生まれ。父は彫刻家の舟越保武。1975 年、東京造形大学彫刻科卒業。1977 年、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。大学院在学中に函館のトラピスト修道院から 2.3 メートルにおよぶ聖母子像の依頼を受け、1977 年、制作・設置した。このとき、初めて楠を材に用いた。その硬度と自身の彫刻する速度とがうまく符合したことから、その後、現在に至るまで楠を主材として用いる。1979 年、妻をモデルに木彫の半身像を制作。大理石の眼をはめこみ、古拙と新味の調和の取れた静謐な彫刻スタイルを確立する。1988 年のヴェネツィア・ビエンナーレで日本代表作家の一人として選出されたのを皮切りに、1989 年のサンパウロ・ビエンナーレ、1992 年のドクメンタ IX、シドニービエンナーレなどに参加し、具象彫刻の新しい可能性を広げる作家として国内外で高い評価を得た。1991 年、タカシマヤ文化基金第 1 回新鋭作家奨励賞、1995 年、第 26 回中原悌二郎賞優秀賞、1997 年、第 18 回平櫛田中賞、2003 年、第 33 回中原悌二郎賞、2009 年、芸術選奨文部科学大臣賞、毎日芸術賞を受賞。2011 年紫綬褒章受章。2003 年、「舟越桂 1980-2003」が東京都現代美術館、北海道立旭川美術館などで開催される。

特徴

木彫による人物像を一貫して制作する舟越が、2004 年以降に手がける異形のスフィンクスをモチーフとした版画作品。彼方を見つめるような眼差しと特徴的な長い耳をもつ半人半獣、両性具有のスフィンクス像によって、舟越は人間という捉えがたい存在への洞察を深めてきた。本作では、異なるフォーカスと角度によって捉えられたスフィンクス像が二重に描写されている。口元に笑みをたたえこちらに目を向ける気高さを備えたスフィンクスは色濃く表され、影のような繊細さで浮かび上がるもう一方のスフィンクスはより接近した視点から、斜め下を向く内省的な表情で描かれる。版画でありながら多重露光の写真を思わせる表現を試み、人間存在の多面性を表現しようとした優品といえる。当館が既に収蔵する 1990 年代から 2000 年代前半の木彫および平面作品に続く、作家の重要な転換点を示す作例である。

作家名	リーウーふあん	作品名	ふるむらいんえー		
	李禹煥		FROM LINE A		
	LEE,UFan				
生没年	1936-	作品名 補足			
出生地	韓国慶南	制作年	1981年		
No Image		技法 材質	ドライポイント、アルシュ紙		
		寸法	27.5×34.0cm		
		取得方法	寄贈	エディション	11/20
選定年度	令和3年度	号数		評価額	100,000 円

作家略歴

1936年、韓国慶南に生まれる。ソウル大学校美術大学中退後に来日し、日本大学文学部哲学科を卒業。その後日本を拠点に国際的に活躍。日本の現代美術の動向である「もの派」の理論的支柱を果たし、2010年代に入っても、もの派の延長でその論を深化させている。1969年、「事物から存在へ」が美術出版社芸術評論に入選。1990年、韓国文化省より文化勲章花冠を受賞。1991年、フランス文化省よりシュヴァリエ芸術文化賞を受賞。2001年、高松宮殿下記念世界文化賞・絵画部門受賞。2002年、紫綬褒章に顕彰される。2010年に香川県直島町に李禹煥美術館が開館。2014年、ヴェルサイユ宮殿にてゲストアーティストとして、特別展を開催。多摩美術大学名誉教授。

特徴

既に当館に収蔵されている李の版画作品3点、また今回の収蔵候補作品3点、計6点のうち、最も古い年代の作品となる。1970年より始められた版画作品の制作であるが、本作も当初より続く「線より」のシリーズに属する。1970年代の終わり頃から画面全体が描き込まれ、1980年代に入ると、奔放なストロークが交錯して動性が強まっていく。本作はそうした時期に位置付けられる作例。自動筆記を思わせる線は、意識とは切り離された状況下で刻まれたように秩序なく連なる。それまで覆いつくされていた「地」となる余白があらわとなり、既収蔵作品《遺跡地にて》へと続く作例として重要である。

作家名	リーウーふあん	作品名	いせきちにて 2		
	李禹煥		遺跡地にて 2		
	LEE,UFan				
生没年	1936-	作品名 補足			
出生地	韓国慶南	制作年	1984年		
No Image		技法 材質	リトグラフ、紙		
		寸法	67.0×81.0cm		
		取得方法	寄贈	エディション	39/50
選定年度	令和3年度	号数		評価額	200,000 円

作家略歴

1936年、韓国慶南に生まれる。ソウル大学校美術大学中退後に来日し、日本大学文学部哲学科を卒業。その後日本を拠点に国際的に活躍。日本の現代美術の動向である「もの派」の理論的支柱を果たし、2010年代に入っても、もの派の延長でその論を深化させている。1969年、「事物から存在へ」が美術出版社芸術評論に入選。1990年、韓国文化省より文化勲章花冠を受賞。1991年、フランス文化省よりシュヴァリエ芸術文化賞を受賞。2001年、高松宮殿下記念世界文化賞・絵画部門受賞。2002年、紫綬褒章に顕彰される。2010年に香川県直島町に李禹煥美術館が開館。2014年、ヴェルサイユ宮殿にてゲストアーティストとして、特別展を開催。多摩美術大学名誉教授。

特徴

本作は版画作品「遺跡地にて」シリーズ(全5点)のうちの1点。1970年代初頭の代表作「点より」シリーズ、「線より」シリーズは、キャンヴァスの一部にのみ筆跡を残し、余白を広くとることが特徴であった。しかし1970年代の終わり頃から画面全体が描き込まれ、1980年代に入ると、奔放なストロークが交錯して動性が強まっていく。時には、それらが重なって層を成し、絵画における空間性を創出することに接近した。本作においては、ベクトルや濃淡の異なるストロークが画面を満たしている。背景には同時期に制作された「風から」シリーズのような縦横無尽な筆の運びが見られ、その上には濃密な線が勢いよく描かれている。当館では《遺跡地にて1》(1984年)が収蔵されている。

作家名	リーウーふあん	作品名	すぺーすぷらんニング		
	李禹煥		スペースプランニング		
	LEE,UFan				
生没年	1936-	作品名 補足			
出生地	韓国慶南	制作年	1985年		
No Image		技法 材質	シルクスクリーン、紙		
		寸法	65.0×54.5cm		
取得方法	寄贈	エディション	8/40		
選定年度	令和3年度	号数		評価額	130,000 円

作家略歴

1936年、韓国慶南に生まれる。ソウル大学校美術大学中退後に来日し、日本大学文学部哲学科を卒業。その後日本を拠点に国際的に活躍。日本の現代美術の動向である「もの派」の理論的支柱を果たし、2010年代に入っても、もの派の延長でその論を深化させている。1969年、「事物から存在へ」が美術出版社芸術評論に入選。1990年、韓国文化省より文化勲章花冠を受賞。1991年、フランス文化省よりシュヴァリエ芸術文化賞を受賞。2001年、高松宮殿下記念世界文化賞・絵画部門受賞。2002年、紫綬褒章に顕彰される。2010年に香川県直島町に李禹煥美術館が開館。2014年、ヴェルサイユ宮殿にてゲストアーティストとして、特別展を開催。多摩美術大学名誉教授。

特徴

1985年に手掛けられた「スペースプランニング」と題される版画3作品のうちのひとつ。いずれも緑と黒、茶の色面によって構成されるもので、抽象的平面作品とみることも可能かもしれないが、70年代より李が手掛ける彫刻作品「関係項」シリーズを思い起こせば、黒は鉄板、茶は石、緑は芝、とみることができらる。李が制作する版画作品は、「点より」シリーズや「線より」シリーズなどに代表されるように、平面作品として仕上げられているものが大多数である一方、本作は鉄板と石を用いた彫刻作品に通じる数少ない例である。「関係項」シリーズでは物質間の関わりをめぐる探究がなされているが、それを平面上で試みようとしていたことを窺い知ることができる作例といえるだろう。李の彫刻は、所蔵作品として野外美術館に1988年制作の《関係項》があるが、これに通ずる平面作品として本作の収蔵は有用であると思われる。

作家名	おおはし えいじ	作品名	さっぽろしてい		
	大橋英児		Sapporo-city		
	OHASHI, Eiji				
生没年	1955-	作品名 補足			
出生地	北海道稚内市	制作年	2019 年		
No Image		技法 材質	ラムダプリント		
		寸法	67.5×90.1cm		
		取得方法	寄贈	エディション	AP 1/2
選定年度	令和3年度	号数		評価額	300,000 円

作家略歴

1955年北海道稚内市生まれ。独学で写真技術を修得した大橋は、1984年から2006年にかけてヒマラヤ、チベットなどの自然と、そこで暮らす少数民族を取材し続けた。厳しい高山地帯の自然と共生する人々をフィルムに収めるうちに、大橋は利便性を追求する日本人の暮らしを客観視し、関心を寄せるようになった。

大橋は、日本のどこにでも当たり前にある自動販売機が、日本の豊かさ、便利さ、安全さを象徴するものであると気づき、2008年以降は日本の自動販売機を被写体としている。日本ならではの光景を写し取った作品は海外でも高く評価されている。

特徴

自動販売機のある風景を撮影した「Roadside Lights」シリーズの一作。本シリーズは日本各地の様々な場所に立つ自動販売機を、昼夜も天候も問わずとらえており、収蔵候補作品はいずれも北海道の雪夜を写し出している。都市部の街角や人通りのない山間部に設置された自動販売機は、闇夜の孤独や厳しい風雪にじっと耐え、いつも変わらぬ便利さと安心感を提供している。その光景は、豊かな生活を享受しているのにどこか物寂しい現代人の生き方と交錯するだろう。本作は中島公園内に設置された自動販売機を撮影している。当館における大橋英児作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	おおはし えいじ	作品名	びらとりたうん		
	大橋英児		Biratori-town		
	OHASHI, Eiji				
生没年	1955-	作品名 補足			
出生地	北海道稚内市	制作年	2019 年		
No Image		技法 材質	ラムダプリント		
		寸法	67.5×90.1cm		
		取得方法	寄贈	エディション	AP 1/2
選定年度	令和3年度	号数		評価額	300,000 円

作家略歴

1955年北海道稚内市生まれ。独学で写真技術を修得した大橋は、1984年から2006年にかけてヒマラヤ、チベットなどの自然と、そこで暮らす少数民族を取材し続けた。厳しい高山地帯の自然と共生する人々をフィルムに収めるうちに、大橋は利便性を追求する日本人の暮らしを客観視し、関心を寄せるようになった。

大橋は、日本のどこにでも当たり前にある自動販売機が、日本の豊かさ、便利さ、安全さを象徴するものであると気づき、2008年以降は日本の自動販売機を被写体としている。日本ならではの光景を写し取った作品は海外でも高く評価されている。

特徴

自動販売機のある風景を撮影した「Roadside Lights」シリーズの一作。本シリーズは日本各地の様々な場所に立つ自動販売機を、昼夜も天候も問わずとらえており、収蔵候補作品はいずれも北海道の雪夜を写し出している。都市部の街角や人通りのない山間部に設置された自動販売機は、闇夜の孤独や厳しい風雪にじっと耐え、いつも変わらぬ便利さと安心感を提供している。その光景は、豊かな生活を享受しているのにどこか物寂しい現代人の生き方と交錯するだろう。本作は平取町立二風谷アイヌ文化博物館前に設置された自動販売機を撮影したものである。自動販売機は赤や白、紺色のアイヌ文様で彩られ、チセ風の茅葺き屋根に覆われている。当館における大橋英児作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	おおはし えいじ	作品名	むろらんしてい		
	大橋英児		Murooran-city		
	OHASHI, Eiji				
生没年	1955-	作品名 補足			
出生地	北海道稚内市	制作年	2019 年		
No Image		技法 材質	ラムダプリント		
		寸法	67.5×90.1cm		
		取得方法	寄贈	エディション	AP 1/2
選定年度	令和3年度	号数		評価額	300,000 円

作家略歴

1955年北海道稚内市生まれ。独学で写真技術を修得した大橋は、1984年から2006年にかけてヒマラヤ、チベットなどの自然と、そこで暮らす少数民族を取材し続けた。厳しい高山地帯の自然と共生する人々をフィルムに収めるうちに、大橋は利便性を追求する日本人の暮らしを客観視し、関心を寄せるようになった。

大橋は、日本のどこにでも当たり前にある自動販売機が、日本の豊かさ、便利さ、安全さを象徴するものであると気づき、2008年以降は日本の自動販売機を被写体としている。日本ならではの光景を写し取った作品は海外でも高く評価されている。

特徴

自動販売機のある風景を撮影した「Roadside Lights」シリーズの一作。本シリーズは日本各地の様々な場所に立つ自動販売機を、昼夜も天候も問わずとらえており、収蔵候補作品はいずれも北海道の雪夜を写し出している。都市部の街角や人通りのない山間部に設置された自動販売機は、闇夜の孤独や厳しい風雪にじっと耐え、いつも変わらぬ便利さと安心感を提供している。その光景は、豊かな生活を享受しているのにどこか物寂しい現代人の生き方と交錯するだろう。本作は室蘭市祝津町の商店に設置された自動販売機を撮影したもの。当館における大橋英児作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	おおはし えいじ	作品名	さっぽろしてい		
	大橋英児		Sapporo-city		
	OHASHI, Eiji				
生没年	1955-	作品名 補足			
出生地	北海道稚内市	制作年	2020 年		
No Image		技法 材質	ラムダプリント		
		寸法	67.5×90.1		
		取得方法	寄贈	エディション	AP 1/2
選定年度	令和3年度	号数		評価額	300,000 円

作家略歴

1955年北海道稚内市生まれ。独学で写真技術を修得した大橋は、1984年から2006年にかけてヒマラヤ、チベットなどの自然と、そこで暮らす少数民族を取材し続けた。厳しい高山地帯の自然と共生する人々をフィルムに収めるうちに、大橋は利便性を追求する日本人の暮らしを客観視し、関心を寄せるようになった。

大橋は、日本のどこにでも当たり前にある自動販売機が、日本の豊かさ、便利さ、安全さを象徴するものであると気づき、2008年以降は日本の自動販売機を被写体としている。日本ならではの光景を写し取った作品は海外でも高く評価されている。

特徴

自動販売機のある風景を撮影した「Roadside Lights」シリーズの一作。本シリーズは日本各地の様々な場所に立つ自動販売機を、昼夜も天候も問わずとらえており、収蔵候補作品はいずれも北海道の雪夜を写し出している。都市部の街角や人通りのない山間部に設置された自動販売機は、闇夜の孤独や厳しい風雪にじっと耐え、いつも変わらぬ便利さと安心感を提供している。その光景は、豊かな生活を享受しているのにどこか物寂しい現代人の生き方と交錯するだろう。本作は札幌市豊平区にある旧旭水市場に設置された自動販売機を撮影している。当館における大橋英児作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	おおはし えいじ	作品名	ゆうばりしてい		
	大橋英児		Yubari-city		
	OHASHI, Eiji				
生没年	1955-	作品名 補足			
出生地	北海道稚内市	制作年	2020 年		
No Image		技法 材質	ラムダプリント		
		寸法	67.5×90.1cm		
		取得方法	寄贈	エディション	AP 1/2
選定年度	令和3年度	号数		評価額	300,000 円

作家略歴

1955年北海道稚内市生まれ。独学で写真技術を修得した大橋は、1984年から2006年にかけてヒマラヤ、チベットなどの自然と、そこで暮らす少数民族を取材し続けた。厳しい高山地帯の自然と共生する人々をフィルムに収めるうちに、大橋は利便性を追求する日本人の暮らしを客観視し、関心を寄せるようになった。

大橋は、日本のどこにでも当たり前にある自動販売機が、日本の豊かさ、便利さ、安全さを象徴するものであると気づき、2008年以降は日本の自動販売機を被写体としている。日本ならではの光景を写し取った作品は海外でも高く評価されている。

特徴

自動販売機のある風景を撮影した「Roadside Lights」シリーズの一作。本シリーズは日本各地の様々な場所に立つ自動販売機を、昼夜も天候も問わずとらえており、収蔵候補作品はいずれも北海道の雪夜を写し出している。都市部の街角や人通りのない山間部に設置された自動販売機は、闇夜の孤独や厳しい風雪にじっと耐え、いつも変わらぬ便利さと安心感を提供している。その光景は、豊かな生活を享受しているのにどこか物寂しい現代人の生き方と交錯するだろう。本作は夕張市の道端に設置された自動販売機を撮影している。当館における大橋英児作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	ふじくら つばさ	作品名	cropped PR. Ng. JP. '17 No.1		
	藤倉翼		cropped PR. Ng. JP. '17 No.1		
	FUJIKURA, Tsubasa				
生没年	1977-	作品名 補足			
出生地	北海道北広島市	制作年	2017年		
No Image		技法 材質	インクジェットプリント、木(オーク)		
		寸法	31.5×44.0×4.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	100,000	円

作家略歴

1977年北海道北広島市生まれ。写真家である父親からの影響で1988年より写真をはじめ。2002年、写真事務所エアボックスを設立し、フリーカメラマンとしての活動を開始。2008年頃から、同じ時間・同じ場所に集まる群衆が繰り広げるドラマに注目し、「関係線(Lines of relation)」シリーズに取り組み始めた。これと同時期に、ネオンサインとその風景を撮影することから始まった「ネオンサイン(NEON-SIGN)」も展開している。作品制作のほか、雑誌などのエディトリアル向け撮影、「三菱自動車」「トーヨータイヤ」などの広告にも写真を多数提供している。2005年にエスクァイアデジタル写真賞06-07 Art of still life賞、2014年に東川国際写真フェスティバル 赤レンガ公開ポートフォリオオーディションにて準グランプリ受賞。

特徴

「ネオンサイン(NEON-SIGN)」シリーズの一作。本シリーズでは、本来、広告や案内看板であるネオンサインが写真の被写体となることで、ネオンサインそのものの価値、ネオン管職人の技術の高さがあらわとなった。このことに意識的になるかのように、藤倉は撮影対象をネオンサインのある風景から徐々にクローズアップし、ネオンサインそのものを大胆にトリミングするようになった。本作は名古屋市栄の大観覧車横にかつてあった「プロトコーポレーション」のネオンサインの「ロ」の部分拡大して撮影したもの。本シリーズの作品は、いずれもモチーフが真正面から捉えられ、画面そのものの平面性が強調されている。しかしその一方で、熟練の木工職人が手掛けた精緻な額縁と三次元的な作品展開によって、作品は単なる平面の絵画ではなく、物質としての存在感を獲得している。当館における藤倉翼作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	ふじくら つばさ	作品名	cropped SB. Sp. JP. '17 No.1		
	藤倉翼		cropped SB. Sp. JP. '17 No.1		
	FUJIKURA, Tsubasa				
生没年	1977-	作品名 補足			
出生地	北海道北広島市	制作年	2018年		
No Image		技法 材質	インクジェットプリント、木(オーク)		
		寸法	84.0×111.0×7.5cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	200,000	円

作家略歴

1977年北海道北広島市生まれ。写真家である父親からの影響で1988年より写真をはじめ。2002年、写真事務所エアボックスを設立し、フリーカメラマンとしての活動を開始。2008年頃から、同じ時間・同じ場所に集まる群衆が繰り広げるドラマに注目し、「関係線(Lines of relation)」シリーズに取り組み始めた。これと同時期に、ネオンサインとその風景を撮影することから始まった「ネオンサイン(NEON-SIGN)」も展開している。作品制作のほか、雑誌などのエディトリアル向け撮影、「三菱自動車」「トーヨータイヤ」などの広告にも写真を多数提供している。2005年にエスクァイアデジタル写真賞06-07 Art of still life賞、2014年に東川国際写真フェスティバル 赤レンガ公開ポートフォリオオーディションにて準グランプリ受賞。

特徴

「ネオンサイン(NEON-SIGN)」シリーズの一作。本シリーズでは、本来、広告や案内看板であるネオンサインが写真の被写体となることで、ネオンサインそのものの価値、ネオン管職人の技術の高さがあらわとなった。このことに意識的になるかのように、藤倉は撮影対象をネオンサインのある風景から徐々にクローズアップし、ネオンサインそのものを大胆にトリミングするようになった。星形に屈曲させたネオン管が目を引く本作は、札幌の人々に広く親しまれてきたすすきの交差点の「サッポロビール」ネオンサインを被写体とした作品である。本シリーズの作品は、いずれもモチーフが真正面から捉えられ、画面そのものの平面性が強調されている。しかしその一方で、熟練の木工職人が手掛けた精緻な額縁と三次元的な作品展開によって、作品は単なる平面の絵画ではなく、物質としての存在感を獲得している。当館における藤倉翼作品の収蔵は本年度が初となる。

作家名	かとうけんせい	作品名	おんなのくびB		
	加藤顕清		女の首 B		
	KATO, Kensei				
生没年	1894-1966				
出生地	岐阜県	作品名 補足			
No Image		制作年	1960 年頃		
		技法 材質	ブロンズ		
		寸法	10.8×8.5×10.0 cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	100,000	円

作家略歴

1894年12月19日岐阜県に生まれ、まもなく移住し幼少年時代を北海道で過ごす。上川中学(現旭川東高校)を卒業し上京、中原悌二郎と知り合い彫刻家への道を歩む。1920年東京美術学校彫刻科塑造部本科を卒業、1923年同研究科を修了。彫刻科在学中の1921年第3回帝展に《静寂》が初入選し、以後毎年入選した。1928年第9回帝展で《女人像》が特選に挙げられ、第10回・11回展と連続特選。その後長年にわたり、帝展、文展、日展等の審査員をつとめ、終始官展系の有力作家として活躍し、また後進の指導育成に尽力した。硬質でアカデミックな人物像の制作に注力し、人間存在を厳しく見つめる作品を多数手がけた。上京後も北海道とのつながりは折々に濃く、北海道庁の嘱託としての熊彫り技術指導や北海道百年を記念する顕彰像の制作などの依頼を受けた。

特徴

加藤は大型の彫刻作品と並行して、掌に収まるような小作品を好んで時折制作した。これらを「記憶のスケッチ」と作家は呼び、たびたび制作したのは《女の顔》(1960年作、「堀進二・加藤顕清展」(神奈川県立近代美術館、1989年)図録掲載)など女性の頭像であった。本作は、重厚な作風を常とする作家の大型作品とは対照的な柔和さと温かみを備えている。当館に既に所蔵される同程度のサイズの《少女の首》(石膏)と同系統の作風を示す作品としても貴重である。

作家名	かとうけんせい 加藤顕清	作品名	よこたわるらふ 横たわる裸婦		
	KATO, Kensei				
生没年	1894-1966	作品名 補足			
出生地	岐阜県	制作年	1961 年頃		
No Image		技法 材質	石膏		
		寸法	11.5×26.4×12.8 cm		
		取得方法	寄付		
取得方法	寄付	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	300,000	円

作家略歴

1894年12月19日岐阜県に生まれ、まもなく移住し幼少年時代を北海道で過ごす。上川中学(現旭川東高校)を卒業し上京、中原悌二郎と知り合い彫刻家への道を歩む。1920年東京美術学校彫刻科塑造部本科を卒業、1923年同研究科を修了。彫刻科在学中の1921年第3回帝展に《静寂》が初入選し、以後毎年入選した。1928年第9回帝展で《女人像》が特選に挙げられ、第10回・11回展と連続特選。その後長年にわたり、帝展、文展、日展等の審査員をつとめ、終始官展系の有力作家として活躍し、また後進の指導育成に尽力した。硬質でアカデミックな人物像の制作に注力し、人間存在を厳しく見つめる作品を多数手がけた。上京後も北海道とのつながりは折々に濃く、北海道庁の嘱託としての熊彫り技術指導や北海道百年を記念する顕彰像の制作などの依頼を受けた。

特徴

令和3年度収蔵候補作品のブロンズ像《横たわる裸婦》の原型として用いられた石膏像。当館には資料として、本作の雌型であるシリコン型が既に収蔵されている。シリコン型に加えて、石膏像である本作、そしてブロンズ像の収蔵がかなうならば、北海道ゆかりの重要作家の制作プロセスを示す貴重なコレクションとなる。

作家名	かとうけんせい 加藤顕清	作品名	よこたわるらふ 横たわる裸婦		
	KATO, Kensei				
生没年	1894-1966	作品名 補足			
出生地	岐阜県	制作年	1961 年頃		
No Image		技法 材質	ブロンズ		
		寸法	11.0×26.0×12.2 cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数	評価額	300,000	円

作家略歴

1894年12月19日岐阜県に生まれ、まもなく移住し幼少年時代を北海道で過ごす。上川中学(現旭川東高校)を卒業し上京、中原悌二郎と知り合い彫刻家への道を歩む。1920年東京美術学校彫刻科塑造部本科を卒業、1923年同研究科を修了。彫刻科在学中の1921年第3回帝展に《静寂》が初入選し、以後毎年入選した。1928年第9回帝展で《女人像》が特選に挙げられ、第10回・11回展と連続特選。その後長年にわたり、帝展、文展、日展等の審査員をつとめ、終始官展系の有力作家として活躍し、また後進の指導育成に尽力した。硬質でアカデミックな人物像の制作に注力し、人間存在を厳しく見つめる作品を多数手がけた。上京後も北海道とのつながりは折々に濃く、北海道庁の嘱託としての熊彫り技術指導や北海道百年を記念する顕彰像の制作などの依頼を受けた。

特徴

右腕を頭の下に置き、左腕を腰のあたりで緩やかに持ち上げるようにしてまどろむ女性の横臥像。脚部の滑らかな仕上げに比べ、頭から腕にかけての上半身は粘土跡が残され、作品に柔らかなニュアンスを与えている。本作は当館所蔵の《像》(1961年、石膏。ブロンズ像を翌年の第2回瞳々会彫塑展に出品)と同様のサイズと主題であり、この時期の作家が従来の堅固な構築性を備えた大型彫刻作品とは趣を異にする裸婦像を模索していたことを示す作例である。

作家名	こばやししげよ	作品名	ゆるやかにちかづきたい		
	小林重予		ゆるやかにちかづきたい		
	KOBAYASHI, Shigeyo				
生没年	1957-2017	作品名 補足			
出生地	札幌市	制作年	1997 年		
No Image		技法 材質	木、銅、真鍮、綿、羽、ナイロン、ガラス、アルミニウム箔、モデリングペースト、ラッカー、アクリル		
		寸法	(a)182.0×78.5×38.0cm, (b)138.0×12.0×20.5cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和 3 年度	エディション			
		号数	評価額	1,200,000 円	

作家略歴

1957 年札幌市生まれ、1981 年文化女子大学造形美術科金属工芸専攻科修了。1990 年北海道文化財団海外交流研修費助成によりアメリカ研修、1994～96 年インドネシア国立芸術大学およびバリ州マス村にて木彫研修。以後、木や金属、ガラスなど多様な素材を用いて、架空の種子や果実、植物を思わせる有機的な作品を制作し、個展、グループ展などで発表を行うほか、札幌ドームや摩周厚生病院などのパブリック・アート、演劇公演の舞台美術、ワークショップなどを手掛ける。2004 年道銀芸術文化奨励賞受賞。2017 年没。

特徴

インドネシア留学からの帰国直後 1997 年に開催された個展での出品作品の一つ。大型の 2 パーツで構成される。一方は、人間の足のようでもあり、歯牙のようにもみえる部分から、逆円錐状の青と赤のパーツが二つ、金属で構成された逆零型のパーツがつながる。上部に向けて広がるように立ち上がるそれらからは、有機的で今にも動き出しそうな、生長のエネルギーを感じさせる。もう一方は右上部に展開される矢のようなパーツで、他方に向けて伸びていく指向性がある。彩色木彫をベースに、様々な素材を縦横自在に駆使し作り上げられた形からは、小林の寄せていた植物の営みへの関心が存分にうかがえる。

作家名	ほんだ せいじ	作品名	black absentree		
	本田 征爾		black absentree		
	HONDA, Seiji				
生没年	1977-	作品名 補足			
出生地	京都府	制作年	2017 年		
No Image		技法 材質	アクリル、石粉粘土、ジェツソ		
		寸法	37.0×13.0×13.0cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和3年度	エディション			
		号数	評価額	150,000	円

作家略歴

1977年京都府生まれ。北海道大学水産学部を卒業したのち、2002年、マグロ延縄調査船に乗りこむかたわら、船内で本格的に作品制作を開始する。その後も国内外での調査航海と船内での制作を行い、2011年以降は作家活動に専念する。京都、札幌を中心に精力的に個展を開催。石粉粘土とジェツソにより造形した後、アクリル絵具で丹念に彩色する人物や異形の彫刻作品と、闇の中から浮かび上がるような幻想的な人物像、動物表現を得意とする。

特徴

まどろむような表情をした白い顔の人物の頭部が、黒い枝に変化していく。人物の顔の周囲は色彩が幾層にも重ねられ、精妙な青色で覆われている。上へと伸びゆく枝には生命感があるとともに、曲がり、絡まり合う枝々が生み出す空間が軽やかさと華やぎを演出している。本作は、人と人ならざるものが領域横断的に存在するさまを表現しており、作家が好んで制作する同系統の作例の一つとして位置づけられる。そのなかで、本作のように人と植物的なるものの混淆を示す作品は新たな展開を示すものといえる。

作家名	ほんだ せいじ	作品名	ゆうやみのきみ(よるへ)		
	本田 征爾		夕闇の君(夜へ)		
	HONDA, Seiji				
生没年	1977-	作品名 補足			
出生地	京都府	制作年	2017 年		
No Image		技法 材質	アクリル、石粉粘土、ジェツソ、キャンヴァス地		
		寸法	28.0×18.0×13.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和3年度	号数		評価額	150,000 円

作家略歴

1977年京都府生まれ。北海道大学水産学部を卒業したのち、2002年、マグロ延縄調査船に乗りこむかたわら、船内で本格的に作品制作を開始する。その後も国内外での調査航海と船内での制作を行い、2011年以降は作家活動に専念する。京都、札幌を中心に精力的に個展を開催。石粉粘土とジェツソにより造形した後、アクリル絵具で丹念に彩色する人物や異形の彫刻作品と、闇の中から浮かび上がるような幻想的な人物像、動物表現を得意とする。

特徴

縦長の顔型で目尻の上がった面は、ヴェネツィアの仮面を思わせる奇妙な不思議さを醸し出している。全体の色調は作家に特有の落ち着いた紺色にまとめられている。目の周囲に水色と桃色、金色でアクセントがつけられ、明るい夜空を思わせる色彩の重なりは出色である。古来より仮面は儀式や祭りの際に用いられ、自分ではない何ものかを装うための道具であった。本作は仮面のもつある種の不気味さが薄められ、渦巻状の植物的な細部や動物の耳をほうふつとさせる上部の形により、作家の得意とするコミカルな趣きが生みだされている。

作家名	ほんだ せいじ	作品名	あおかちまち		
	本田征爾		あおかちまち		
	HONDA, Seiji				
生没年	1977-	作品名 補足			
出生地	京都府	制作年	2020 年		
No Image		技法 材質	アクリル、石粉粘土、ジェッツ、アメジスト		
		寸法	17.5×10.5×19.3cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和3年度	エディション			
		号数	評価額	150,000	円

作家略歴

1977年京都府生まれ。北海道大学水産学部を卒業したのち、2002年、マグロ延縄調査船に乗りこむかたわら、船内で本格的に作品制作を開始する。その後も国内外での調査航海と船内での制作を行い、2011年以降は作家活動に専念する。京都、札幌を中心に精力的に個展を開催。石粉粘土とジェッツにより造形した後、アクリル絵具で丹念に彩色する人物や異形の彫刻作品と、闇の中から浮かび上がるような幻想的な人物像、動物表現を得意とする。

特徴

やや前かがみの姿勢で座している犬は目を大きく丸く見開き、石粉粘土とジェッツによって形作られた丸みを帯びた体つきには愛嬌さえ感じられる。本作のタイトルは日本の伝統色である青褐(あおかち、藍と墨を混合した濃紺色)にちなむ。陰影に富んだ夜の闇を思わせる表面の彩色にはアメジストが加えられ、作品は抑制された輝きをまとっている。見る者の心をほどくユーモラスなかわいらしさを備えた造形と、丹念に仕上げられた彩色表現が確かな技術によってなされ、北海道における塑像表現の新たな局面を表している。

作家名	しもざわどほう	作品名	〔ありそおおつぼ〕		
	下澤土泡		〔ありそ大壺〕		
	SHIMOZAWA, Dohou				
生没年	1926-2002	作品名 補足			
出生地	北海道広尾町	制作年	1986 年頃		
No Image		技法 材質	陶		
		寸法	42.8×40.0×38.7cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和 3 年度	エディション			
		号数	評価額	500,000	円

作家略歴

1926年北海道広尾町生まれ。30歳をすぎて陶芸の道へと入る。「北海荒磯焼」を創始し、北海道の土で北海道の陶芸を生みだすことに腐心した。1986年札幌市文化奨励賞受賞、1988年陶光会全国陶芸展文部大臣奨励賞、1990年同展内閣総理大臣賞受賞。1996年イギリス王室・バッキンガム宮殿に作品納入。また作品制作の一方で、1971年に北陶会を設立、翌年第1回北陶会会員展を開催(1984年、北海道陶芸協会、ならびに北海道陶芸展へ改称)。道内各地を精力的に回り講習を行うなど、北海道における陶芸の普及、裾野の拡大に尽力した。2002年没。

特徴

本作は、桂信雄元市長のコレクションだったもの。札幌芸術の森の開園ならびに登り窯の設立に際し、作家の協力を仰いだことから親交が生まれ、それを機に作家から贈呈されたという。肉厚に仕上げられた荒々しい土肌、うねりを伴う口、また口から内部、胴部に今でも流れ落ちそうなほどぼつりとした白釉がかけられ、全体をとおしてダイナミックで重厚な風格を漂わせる。作家が創始した北海荒磯焼の名のとおり、北国の厳しい自然とその土地の土が歩んできた歴史が感じられる。